

6月の安全運転のポイント 平成22年6月号

雨天時は、視界が悪い、路面が滑りやすいなど車にとって悪条件が重なるときですが、歩行者や自転車にとっても同様であり、それが思わぬ危険な行動につながる可能性があります。そこで今回は、6月の梅雨のシーズンを迎えるにあたって、雨天走行時における歩行者や自転車に対する注意点をまとめてみました。



歩行者に対する注意点

雨の降り始めは危険な行動をとることがある

雨が降りだしても車の中にいるドライバーは濡れる心配はありませんが、歩行者はそうではありません。特に傘を持っていない歩行者は濡れるのを避けるため、早く目的地へ行こうとしたり、適当な場所で雨宿りしようと先を急ぎます。その結果、車に対する注意が欠けて、十分な安全確認をせずに道路を横断したり、赤信号で交差点を渡ってることがあります。雨の降り始めは、歩行者の動きによく目を配りましょう。



周囲に対する注意が欠けやすい

雨天時は車だけでなく、傘をさしている歩行者の視界も悪くなります。また、水たまりなど路面を気にして歩くこともあって、周囲に対する注意力が欠け、車の接近に気づくのが遅れることがありますから、歩行者に接近するときは十分速度を落としましょう。

歩道から車道に出てくることがある

狭い歩道では、傘をさしている歩行者同士のすれ違いが窮屈になり、互いの傘が接触したり、傘のしずくが相手にかかってしまうことがあります。ときにはそれがトラブルの原因になるケースもあるため、歩道でのすれ違いを避けようとして、歩行者が歩道から車道に出てくることがありますから、歩道の歩行者の動きにも注意しましょう。



道路脇の歩行者を見落とすことがある

ワイパーはフロントガラスに付着した水滴をすべて除去できるわけではありません。特にワイパーの届かないフロントガラスの端は水滴が残って見えにくくなります。そのため道路脇に立っている歩行者に気づくのが遅れ、歩行者の横断を見落とすことがありますから注意しましょう。



自転車に対する注意点

傘さし運転の自転車は不安定

片方の手で傘をさして自転車を運転する、いわゆる「傘さし運転」は違反行為ですが、現実には傘さし運転をする自転車は少なくありません。そのような自転車は非常に不安定であり、風雨が強いときには、風に傘をとられてバランスを崩し転倒するケースもあります。傘さし運転の自転車に接近するときは速度を落とすとともに、追い抜くときには十分な側方間隔をとるようにしましょう。

傘さし運転の自転車は止まらない

傘さし運転の自転車は不安定なだけではありません。片方の手のみでブレーキ操作をしなければならないため、両方の手でブレーキをかけるときのような強い制動力が得られず、急停止することが難しくなります。しかも、路面が濡れているため、ブレーキをかけたときの停止距離も長くなりますから、交差点などで傘さし運転の自転車が接近しているときは、自転車のほうが止まるだろうとは考えずに、自車が交差点の手前で停止できるような速度に減速して進行するようにしましょう。

白線の上はスリップしやすい

雨天時は車だけでなく、自転車もスリップしやすくなります。自転車の場合、横断歩道などの白線の上がスリップしやすいので、前方を走行する自転車が横断歩道にさしかかったときなどは、自転車の動きに十分注意しましょう。

また、道路工事等により路面に鉄板が敷かれているところは、車も自転車もスリップしやすいので、速度を落ととして慎重に運転しましょう。



雨天時にバックするときの留意点

雨に濡れたくないという心理は、ドライバーも同じです。そのため、いつもはバックするときに窓を開けて後方確認をしていますが、雨天時は窓を開けずにリアウインドー越しの確認で済ませてしまうことがよくあります。しかし、リアウインドー越しの確認は死角が大きいうえに、雨滴が付着している場合は後方の状況が見えにくくなりますから、そうした状態でバックするのは大変危険です。雨天でも、窓を開けて後方の確認をしっかりとってからバックするようにしましょう。

「ご相談・お申込先」